

---

# IS<インフィニット・ストラトス>漆黒の騎士と白銀の騎士

中司碧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IIS×インフィニット・ストラトス×漆黒の騎士と白銀の騎士

### 【Zコード】

Z8968Y

### 【作者名】

中司聰

### 【あらすじ】

女性にしか反応しない世界最強の兵器『インフィニット・ストラトス（IIS）』の出現で世界は大きく変わった。  
主人公の火神 雄は「世界で一番目のIISを使える男」としてIIS学園に入れることになる・・・・。

初の一次創作です。小説というものの自体も初めて書く作品であるので、いたらない点があると思いますが、温かく見守ってください。主人公が転校してきた時期は、『学年別個人トーナメント』のす

ぐ後になります。本作メインヒロインはセシリ亞で、徐々にデレで  
行く感じ?になります。オリエイシですが、初期段階ではガンダム  
00の機体から引用しています。それ以後は完全オリジナルです。

「え、えーと・・・・」

精神的にかなりヤバいんじゃないだろうか。

教室に入つて十秒もかからないうちに膣つた。

(ニ)、これは・・・・想像以上だ・・・・)

見渡す限り女子女子女子そして女子。  
視界にはもうそれ以外映つてなどいない。

想像を超える光景に、オレは啞然と立ち尽くすしかなかつた。

想像してごらん。自分がオレを含めて二人しかいない状況を。

想像してごらん。男がオレを含めて二人しかいない状況を。

想像し(「y

ダメだ。埒が明かない。この状況を打破するにはどうしたらいいーーー!

ん? な、なんだろ。軽く脚を突かれたぞ。

目線を少し下に降ろすと、そこにはもう一人の『男』がいた。

チヨンチヨン

「世界で唯一EVAを使える男」こと、『織斑一夏』その人である。

混乱しているオレを見かねてか、心配そうにこちらを見ている。

そして口パクでこう言った。

「がんばれ」

暖かいお言葉ありがとうございます先輩！

いや、実際は同じ年なわけなので先輩も後輩もないんだけど。

「スーーツ、ハーーツ」

一度深呼吸をして不安を頭から取り除く。

こんなことで取り除けるわけもないが、頭を切り替えることはできる。

深く深呼吸をして、いざ出陣の時！

「きよ、今日から、こ、この学園に転校してきました火神雄かがみゆうです。  
よろしくお願ねがいします」

出だしはちょっと失敗したが言い切つたぞ！

偉い！偉いぞオレ！よくやつたぞオ

パン！！

「痛つてえ！」

な、なんだ！ いつたい何が起きたんだ！？

いきなり頭を叩かれて、オレはまた混乱する。

そんなオレを呆れ半分で見ている教師が一人。

「火神、もう少しマシな自己紹介はできんのか」

そんなこと言つたって無理なもののはむ

パン！ ！ ！

「イッテヒー！」

先程より一割増しで強く叩かれる。

それにして名簿帳つてこんなに痛いものなんだな。 高校生になつてから解つたことだ。

「まつたく、周りを見ろ。もう少し期待に応える努力をすれ

そんな無茶苦茶な・・・。

改めて周りを見てみると、周囲からは物凄い期待の目線が送られてきている。

(ヘンな期待はしないでくれよー)

「うう・・・・・」

おこおいおい、そんなに期待しないでくださいよ姫さん。

「早く言え。まだ言つてないことがあるだろ?」

「・・・・・え?」

まだ言つてないこと?な、なんだ・・・・なんなんだチヨ「ボ

「シクン! - !

「ダアアアアアア! 痛いですよー。」

「死にたいか?」

「うぐう・・・・・・」

織斑先生の鋭い吊り目がオレを睨む。

言つてないこと? そんなの あ、あつた。

「思ひ出したか?」

「あ、は、はい・・・・・」

「なになにー?」

「早く言つて——」

女子からまたもや期待の目線が送られる。

「あ、あの……一応……代表候補生……です」

「えつ——！」

「ほ、本当！——」

「今度工Uのこと教えて——.——.」

言つた瞬間にクラス中の女子が騒ぎ出す。

「はあ……」

織斑先生は頭を痛そうに抱えてため息をつく。

「ううなるのか嫌だつたなら言わせないでくださいよ……」

「後で騒がれるよりはマシだうつ？お前も私も」

「う、うもつとも

そこから質問攻めをくじかれてことを覚悟していたが

「静かにじる馬鹿者」

織斑先生の一喝で、すぐに騒ぎが静まる。

さすがにこの人に逆らおうなんて人はいないはず。

「キャーもつとぞつて——！」

「どんどん黙つて下せ」お姉様あ――――！」

ん？な、なんか逆らいひどいが抜け入れてるわおーーー？

「これだからガキは・・・・・」

またため息をする先生を見ていた副担任の先生は、鎮圧しようとしている。

「み、みなさん、今はS H R の時間なので静かにーーー！」

かなり大きな声をだすがついで過ぎて届かない。  
しかもそんな生徒の反応のせいが、なぜか泣き出しちゃうだ。

「あ、あの・・・・・先生・・・・・？」

「う・・・・・火神君、私どうしたひ・・・・・」

「いや、あの、泣かないでくださいよ先生ーーー！」

「だつて、私なんかじや・・・・・」

今にも泣き出しかねないこの人・・・・・。

「と、とつあえず先生の名前は？」

とつあに思い付いた言葉を口にだす。

「わ、私ですか？」

「グスン」と、なんとか泣き出すのを堪えて血口紹介をしてくれた。

「副担任の山田真耶です。今日から二年間、頑張りましょうね」

「は、はー」

涙を拭いて、ニコッと笑ってくれた。

まあ、ちょっと無理矢理感があったが、そんなことを言つたらまた  
わざわざと回りこむとなる。

そのため、このジックル心の中じょっぺ。

六月もくれにせしかかり、ビヨドン外は暑くなつてきた。

だが、それでもまだ蒸し暑こと言つよつは過げしやすこ暑れヒトつ  
た感じの温度だ。

その暑さも教室の中ならこちっこー。

そう、眠つを誘う程。

スペアーン！

「うがつー！」

「転校そつれつ私の授業で寝るとはこい度胸だな、火神？」

ヤバイ、織斑先生の授業で寝てしまった！

「あ、あのぉ……オレ、寝てました?」

スパン!!

「はい、すいませんでした。以後、気をつけます」

「わかればよろしく」

そつと先生は教卓に戻る。

不運なことに、オレは一番前の席になってしまったわけで、寝ていたらそつこりでわかる。

代償として一夏が左隣りにいるからまだよかったです。

キーンコーンカーン

先生が教卓に着くと同時に、三時間の終了を知らせるチャイムが鳴る。

「以上だ。今日の授業はここまでとする。午後からは先田行ったトーナメント一回戦の試合を消化する。昼食後は各自準備を整えておけ」

「「「はーい」「」」

先生が教室から出るやいなや、女子たちがオレの周りに群がってきた。

「ねえねえ、火神君の専用機ってどんなの?」

「彼女とかいる？」

「趣味はなんですか！」

なんかもつざれに答えていいのかわからない。  
オレは聖徳太子じやないんだかな……。

「みんな、それぐらいにしてやれよ」

そこへ一夏が助け舟を出してくれる。

「えー、だつて気になるんだもん」

「知りたいんだもーん」

「らしさ」、駄々をこねるな。

「まあまあ、それはまた今度にしようぜ」

一夏の説得により、オレの周りにいた女子たちは散り散りになつて、  
どこかへ行つてしまつた。

「助かつた……」

「大変だな火神」

「織斑は随分と余裕だな？」

「俺か？俺は慣れただけさ。あと俺は一夏でいいぞ。ややこしいだ

る

「それもそうだな。ならオレも雄でいいよ」

「わかった」

今改めて思つ。このクラスに転校してきてよかつたあ・・・。  
小さな幸せを噛み締めるていたら、

「二人ともー」

誰かが声をかけてきた。

「ん?なんだシャル」

「食堂に行かない?ほら、転校生君も連れてさ」

「いいなそれ。よし、じゃあ行こうぜ」

「え、あ、おう」

一夏と女の子に連れられて、食堂に向かうこと。

食堂に着いてそうそう、かなりの人数の女子生徒に驚いた。

「うわー、いつも見るとまた凄いな」の学園・・・」

教室とはまた違つ光景を呈にしてまた畠然としてしまう。

「ほり、雄。早く並ぼうぜ」

「じゃあ僕はテーブル確保しておくな。静かに食べたいだろうから奥のほうで」

「あ、ありがとうございます。なんかゴメン」

女の子の配慮に思わず謝つてしまひ。

「いひつてそんなこと。それじゃ、僕の分もお願ひね一夏」

「おう、わかった」

女の子は足早に食堂の奥へ消えていった。

「優しいんだなあの子」

「シャルはけつ」いつ氣が利くからな

「シャルって書いつのか」

「ああ、やつか。雄はまだクラスの女子から血口紹介をれてないもんな」

「やつこえばそうだな」

一 夏と蝶りながらも列はどんどんカウンターに近づいていく。

「ヒロイド雄の専用機ってどんなのなんだ?」

「オレの専用機?」

「なんか雄の専用機って凄やつだぞ」

いやいや、そんなクラスの女子に似た期待をしないでくださいよ一 夏さん。

「そ、そんなに期待しないでくれよ。やつは一 夏の専用機ってどんなのなんだよ。『世界で唯一のヒロイド使える男』、織斑一 夏の専用機もそれ相応に凄いんだろ?」

「いやいやいや、俺の田辺はそんなもんじゃなーせ」

田辺 一 夏の専用機の名前だらうか?

「田辺ひで吉のひのか。カツコトイイな」

「んーまあ後で見せるわ」

そんな会話をしていたら、いつの間にか受け取りカウンターに着いていた。

カウンターで自分の頼んだ料理を受けとって、シャルがいる食堂の奥へ進む。

食堂の奥へ進むにつれて、生徒の数が少なくなつていぐ。

「食堂の奥つて普段はあまり人いんだぜ」

「やつぱ面白いだしな」

「でも今日みたいに天気のいい日は特別、窓際の席が埋まるんだ」

よく見れば奥に行けば行くほど人が増えてきた。

「おーい、一夏あー転校生くーん！」

「おーい、一夏あー転校生くーん！」

シャルと呼ばれる女の子がオレ達を呼ぶ声がしたのでそちらを見る。

キープしてくれたテーブルは窓際の景色が楽しめる所だ。

「スマン、シャル。ちょっと混んでたから遅くなつた」

「一夏は遅くなつたことをシャルに説ぎる。

「いひつていひつて。早く食べよつよ。冷めちやうし

「ま、雄も座らうぜ」

「ねい」「ひむ

料理が乗ったおぼんをテーブルに置いて椅子に座る。  
オレの位置は正面に一夏、左隣りにシャルといつ感じ。

シャルの正面はちょうど埋まつてないので景色が堪能できた。

「それじゃ食うか」

三人で合掌をして、

「　　「　　「　　」　　」　　」　　」

そして各自の料理を食べる。

オレはざるそば、一夏は焼肉定食、シャルは肉じゃが定食をそれぞれ口にする。

「　　」　　」　　」　　」

「　　」　　」　　」　　」

「　　」　　」　　」　　」

そんな会話をしつつも箸は止まらない。

ちよつと行儀は悪いが、少し話したらまた食べるのに集中する。

「　　」　　」　　」　　」

三人一緒に食事を終えたら、次は自己紹介へ。

「まだ血几紹介とかまだだつたよね」

「やつにえばそつだな」

「僕はシャルロット・トコノア。フランスの代表候補生なんだ。よろしくね、えーと・・・・」

「雄でいこよ。じゅうじゅくじく頼む。えーと・・・・」

「シャルでいこよ。シャルロットじゅうじゅくじくね雄」

「一チ」「こと微笑んでくれた。

中性的な顔立ちで、金髪を首の後ろで束ねている。『僕』とは言ってこるが、制服はちゃんと女子のモノを着ていた。

格好は別として、見よつによつては男にも見えてしまうので、何か変な違和感を感じがしてしまつ。が、そんなことを考えていたら、その笑みに意表をつかれ、つこつこ可愛いと思つてしまつ。

「さて、血几紹介も済んだことだし、まだ時間もある。これからどうする?」

「んー学園を案内してあげたらどうかな?」

「それは名案だな」

おお、いひから頬もつと思つていたらあひからお誘いを受ける

とわ。

あれ、でもたしか午後からは

『これより、先週行われた学年別トーナメントの一回戦をする。前回試合を行っていない一年生は準備しろ。以上だ。』

ブツンと、突然の放送に食堂全体がシーンとなつた。

「今のつて織斑先生だよな？」

「ああ、そうだな」

何故か一夏は悠長にお茶をする。

「ふ、二人とも大丈夫なのか？」

「うん？なにがだ？」

「な、何がって、今の放送だよ！」

「心配ないよ。僕と一夏は先週のトーナメントで一回戦は終わつてるから」

あ、そうなの。それならなんの心配もないわけであり、今もこうして三人で温かい緑茶をすすつてゐるわけで

ブツン！

「な、なんだ！？」

スピーカーからまたノイズが聞こえてきた。

『一年一組の火神は至急、第一アリーナAピットまで来るよ』

ブツン！

• • • • •

「は、せー？」

なにがなんやら状況を把握できていない。

必死に頭を衝かせるが、頭の中が真っ白で何も考えられない。

一  
お  
い  
雄  
?

- は -

一夏の呼びかけで意識が覚醒する。  
それと一緒にある予感が遮る。

織斑先生・・・早く来い・・・」のワードが意味する」

バツ！と、勢いよく席を立つ。

「ヤバイヤバイ！早く行かないとー。」

あたふたと混乱する。

「落ち着いて雄」

「そうだ、まずは落ち着くんだ。深呼吸しろ[深呼吸]

一夏に促されて、その場で深呼吸を二回、

「スーツハーツ、スーツハーツ」

落ち着け、落ち着くんだオレ！

「お、おおおお落ち着いたぞおー！」

「ぜ、全然落ち着いてないよ・・・・。ところで雄」

「う、うんー？な、なんだシャル？」

「第一アリーナの場所はわかつてゐるのかな？」

・・・・・あ。

今更だが、オレはまだ学園内を詳しく把握していない。

そんな状態で学園内をつらつらといへば、いつまでたつてもたゞり着かないであろう。

「い、一夏ーシャル！ば、ばばばば場所を教えてくれー至急だーこ

「は生命にかかる……」

「随分と物騒なこと言つ人だね君」

クスッとシャルが笑う。

「雄、安心しろよ。俺達が案内する」

「あ、ありがと」

オレは半分グズりながらお礼を言ひ。いや、もうグズッてます。

「そつと決まれば早く行こ」

食器を片付けて、一夏とシャルは先程と同じように第一アリーナのAピットに案内してくれた。

プシューッとスライドドアが開かれて、オレと一夏とシャルは第一アリーナのAピットに到着。

「ん? 何故お前たちも一緒にいる?」

「雄はまだ学園内を把握していないんだから、一人で来るのは酷だろ

千冬姉」

「パシーン！ オレは今日で何回！」の光景を田の当たりにしたのだろうか。

「いっ！」

「学園では織斑先生と呼べと言つてこるだらうが」

「お、鬼だ……ん？ 今、『千冬姉』って一夏は言わなかつたか？」

「お、織斑先生つてまさか……」

「やつだ。この不出来な弟の姉だよ。だが今は教師だ。敬えよ？」

「は、はー！」

やつぱこの人は怖い。

逆らつたら何をされるかわかつたもんじやないぞ……。

「あ、あのー織斑先生。時間があまりないんじやありません？」

後ろから三田先生が出てきた。

「つむ、そうだ。火神、準備をしろ」

「じゅ、準備つて……なんのです？」

「これからお前のデータを取る。せつせとヒースツーツを着て！」

「え、でもオレまだ専用機が……」

「安心しろ、手配はした」

「わ、わかりました」

オレは一夏に再度案内をしてもらい、更衣室へ走つて行く。

「織斑先生」

「ん?なんだデュノア?」

「火神君の『S適性』ってどのくらいなんでしょうか?」

「あいつの適性は……」

シャルの目の前から唐突に空中投影されたディスプレイが出てきた。

それを見たシャルは

「こ、これって!」

「凄いですよね、火神君。『S適性』がまさかの『S』ですから」

そう、ディスプレイに表示されている適性ランクは『『S』』を示していた。

「適性は『S』だが、まだまだヒヨックに変わりわない。まあ、今日は腕試しつてところさ」

「ところで、織斑先生。相手がこの一人って、さすがに実力も出せ  
ずに終わってしまうんじゃ……」

山田先生が対戦表を見て言った。  
その対戦表にはこう記されている。

『凰鈴音、セシリア・オルコットVS火神雄』

「せ、先生！これじゃ雄が

「騒ぐなテコノア。言つただろう？腕試し 小手調べぞ」

そうは言つてもこれはやり過ぎではないだらうかとシャルは思った。  
だから納得ができない。

「納得できません！先生は雄を買い被りすぎです！」

「ああ。そうかもな」

「な、なら

「だが、期待もしているのさ。久々に骨のあるヤツがいるのでな

「・・・・・」

そんな先生の気迫に押されてか、シャルはそれ以上何も言わなかつ  
た。  
いや、言えなかつたのだ。

オレは今、第一アリーナの更衣室に一夏と着ている。

「よいしょっと」

IISステッツを着ようと制服を脱ぐ。

「なあ、雄」

「なんだ?」

一夏が突拍子もなく話かけてきた。

「雄の両親ってどんな人なんだ?」

「オレの……両親……か?」

「あ、話たくないなら無理して言わなくてもいいんだぞ」

オレが一瞬迷ったのを察したのか、一夏は無理強いはしないと言つてくれた。

「いや、無理はしない。ちよっとな」

「そりが?ならいいんだが」

そして更衣室に沈黙が訪れる。  
そして、その沈黙を破るようにオレは語り出す。

「率直に語りつと、両親はいないんだ」

「いない？それって……？」

「母さんはもう亡くなってる……」

「す、すまん」

「いいよ、謝らなくても」

「だ、だがなあ」

「人がせっかく話てるんだ。最後まで聞いてくれよ」

一夏は戸惑つてはいたものの、決心がついたのかオレを見る目が真剣なものに変わった。

「わかった。最後まで聞く」

「ありがとう」

一息おいて、また話を再開する。

「父さんは行方不明でさ。安否不明つことになつてゐる」

「なんか俺と似てるな」

「一夏と？」

「実は俺と千冬姉は両親に捨てられてな。だから雄の気持ちも少なからぬわかる」

「そつかあ・・・・・」

まさか一夏といふなシリアルな会話をしようとは思つてもみなかつた。

「「・・・・・・・・・」

またもやじばらく沈黙が訪れる。

・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・  
・・・

もう何分経つたかわからない。それぐらい沈黙が重く感じられるほどだ。

ガチャン

制服からHスースツに着替え終えて、ロッカーを閉める。

「準備はできたか？」

「ああ、できた」

「こんな暗い感じで出たらダメだな」

「うん、たしか」

「よし、今は田の前の」とてに集中しよう。」

一夏がテンションを上げるために顔のマークを上げた。

「わいだなー。わいだなー。」

意気揚々と更衣室を後にした

「遅れてすいま  
」

スパーーン！

「遅いー。」

スライドドアが開かれた瞬間、オレの目の前には名簿帳が現れた。

「す、すこせんでしたあ・・・・。」

「まつたく、着替えるだけで時間をかけるな馬鹿者」

今日ってあれが、厄日なのだろうか？

「準備ができたのならいい。これからお前に支給されるHISを選んでもらつ

「選ぶつて・・・そんなにあるんですか？」

たしかに貴重なデータを取るために今までだつて色々な企業からそのような誘いはあった。

ここにきてもそれは変わらないようだ。

「選んでもらうと書つたが・・・お前が専用機を持つまでの間、学園から特別に支給されるISだ。この一機から選べ」

そう言つてオレの前には一機のISが立つていた。  
いや、待つていたのはうがいいだろ？

一機は純国産ISの『打鉄くうちがね』だ。

純国産の第2世代型IS。機体カラーは黒色を基調としていて、アーマーがまるで鎧武者のような形態をしている。

たしか防御に特化したISのはず。

第2世代ISは安定性と扱いやすさが売りの世代。  
こいつはなかなかいいかもしれない。

一機目は『ラファール・リヴァヴ・疾風の再誕』だ。

デュノア社製の第2世代型IS。操縦しやすく汎用性が高い。外見上の特徴は、ネイビーカラーをした4枚の多方向加速推進翼。

うーん。どちらも今のオレには申し分ない。

一応、日本の代表候補生と言つても、実はISを操縦した経験は全くないのだ。

実に恥ずかしい限りである。

候補生なのに専用機もなく、その上経験もないときたもんだ。

知識はそこそこあるが、これも役に立つかどうかが危ういな……。

こんなんで、何故IS適性がSなのか自分でも疑問に思つ。

(うう・・・・情けないなオレ)

「火神、早く決める。時間がない」

「あ、はい。それならう」

「ちょっと待つた」

ピットにいる全員が入口の方を見る。

そこには真っ白な白髪で眼鏡をかけ、白衣を着ている男が立つていた。

「あなたは・・・・」

「な、なんで先生が一年生の試合に?」

織斑先生と山田先生の両方がその人を見て驚いている。

「なぜ整備科の先生がこんなところにいるんですか?」

織斑先生が白衣の男に疑問を述べる。

「うーん、強いて言つなら……。そうだな、大事な『息子』の初陣だから。では駄目ですかね?」

「なるほど。では一年生の試合は大丈夫なんですね」

「ああ、もちろん。それに僕がいたつて邪魔でしょ?」

そつといつつ、白衣を着た男は苦笑いを浮かべた。

そしてオレはといつと

「・・・・・は?」

見ての通り放心状態である。

なんでだ? なんでオレの目の前には『父親』がいる?

もう、十年も会つていなかつた人がここにきて突然現れやがつた。

「久しぶりだな雄。さすがに十年も会わないと、背は伸びてるものだなー」

言いながらオレの頭をくしゃくしゃとかく。

「イテテテテツ！痛いって父さん」

ドスツ！

「イツツ！…！」

さつさまでかきむしっていた手で、オレの頭にチョップを入れられた。

「ここでは『あまぎり天桐』先生と呼べ」

「は、はい・・・・・」

うん、やっぱ厄日だな。

十年ぶりに会って、早速チョップを食らわす親なんてどこの世界にいるんだよ・・・まあ、ここにいたけど。

「あれ、でも雄の苗字って火神だよな？」

一夏がその疑問にいち早く食いついてきた。

「ああ。オレが名乗つてるのは母さんの姓だからな」

「なるほど」と、納得した一夏であるがまた疑問が浮上してきたのが、再度質問しようとした矢先、

バシンツ！！

「時間がないと言つてこる。」の馬鹿者

「す、すいません・・・」

おお、哀れな一夏よ。今のオレには救える術がない。許しておくれ。

「か、かなり時間も押してるので早く準備をしましょー。」

山田先生は慌てて作業に取り掛かる。

「機体のほうは僕が用意したのを使え。既にパーソナルデータの入力は済んでる。あとは初期化<sup>フォーマット</sup>と最適化<sup>ファイティング</sup>を完了させるだけだ」

「わ、わかった」

天桐の後ろから布に覆われたなにかが現れる。

その何かは言つまでもなくヒラヒラと現れる。

天桐はバサッと、布を取り、オレの前にはヒラヒラが姿を現す。

「これがオレのヒラ?」

「そうだ。だがあくまで仮専用機だ。ちゃんとした物ができるまでの間、当分はコイツで我慢してくれ」

ソイツはオレを待っていたかのように、現れた。

現れたのは打鉄だ。要所要所が若干異なつていて、あとは変

わらない。

変わっている部分は、打鉄とは違い背部に「ローン型のスラスター」が設置されている。

見た感じはこれがメインスラスターである。ひつ。

その背部スラスターに連結された形で二つの小型スラスターが見え、そこから小さな銃口が見える。

どうやらこのスラスター内に各一門ずつキャノンかなにかが内蔵されているようだ。

「こいつは『裂魁×サキガケ』。急ピッチで仕上げた打鉄の発展機だ」

「こうことは第2世代型I-Sってことですよね？でも相手の凰さんとオルゴットさんは第3世代型I-Sですし、データを取るにしてもこにはやはり同世代型同士で戦わせたほうがいいのでわ？」

山田先生が率直な疑問を天桐にぶつける。

「打鉄の発展機と言つたが、裂魁のスペックは現行の第3世代型を圧倒的に凌駕する。これを見れば一目瞭然さ」

そうつ置いて、空中投影のディスプレイが天桐の前に表示される。

そこに表示されたのは裂魁のスペック表だ。

「」「これって！？」

山田先生がスペック表を見て驚く。

「ほう。なかなかの機体ですね先生」

同じものを見た織斑先生はさほど驚いていないようだ。

「うわ、この性能すげーー特に機動性がすば抜けてる」

シャルも山田先生と同じく驚く。

「ほ、本当だ。これはすげーいな」

一夏も二人同様の反応を示す。

「雄、早くしろ。武装は自分で確かめて使え」

「わ、わかった」

急かされて、オレは裂魁に身をゆだねる。

装甲のあちこちが慌ただしく動いているのが直に感じられた。

「すぐに慣れる。今のうちにセンサーに異常はないかを調べておけ」

言われた通りにハイパーセンサーを起動させ、確かめる。

「システムオールグリーン。異常なし」

今だEISの装甲はキチキチと色々な処理を行つていて、少し耳がうるさい。

「火神、準備が出来たならカタパルトにセットしろ」

オープニングチャネルで織斑先生の声が聞こえる。

「了解です」

ガチンツ！

オレは腰を落として偏向重力カタパルトに両足をセシトくる。

「雄」

今度は父さんからのプライベートチャネルだ。

「なんだよ？」

「一つ言こ忘れていたことがある」

言こ忘れたこと？「つたいなんだらうか。

「どなんことだよ？」

「裂魁に搭載されている動力源についてだ。そこには『ヒューズ』  
『ライブ』と呼ばれるものが搭載されている」

「な、なんだそれ？聞いたこともない」

「壇のなればソイツは『ヒューズ』だ。これは母さんが研究し開  
発したコアでな」

「母さんが…？」

「やうだ。そして母さんはそれを防ぐために……お前に託すた

めに殺された「

母さんがそんな物を作ったせいで死んだなんて知らなかつた。

オレは実験中の不慮の事故としか聞いていなかっため、詳しいことは何にも知らされなかつた。

だから特に深く考えずにいた。

それが「ここにきて『殺された』だつて？」

なんだよそれ。納得できない。できるわけもない。

「今はこれ以上は言えん。その時がきたらいつ。今はやるべき」と  
をやれ、いいな」

「…………わかった」

一旦深呼吸をして、頭の中ににあるモヤを取り除く。

(出来るだけ今は目の前にることに集中しないこと)

深呼吸をする「」と三回、空中投影ディスプレイに『Ready』の  
文字が浮かぶ。

「雄、頑張れよ」

一夏からオープンチャネルに入る。

「やれるだけやるさ」

文字が『G。』に変わる瞬間、オレは一気に機体を加速、第一アリーナへと飛び出した。

「さて、お手並み拝見といいつじゃありませんか、天桐先生」

「ええ」

二人の教員が、なにか期待をしているような会話が交わされる。

そして、戦いは始まる。

音もなく忍び寄る影に気づかぬままに

「遅い・・・・・」

「遅いですわね・・・・・」

第一アリーナのステージではまだ来ない対戦相手を待つ中国代表候補生の凰鈴音鈴とイギリス代表候補生のセシリ亞・オルコットがいた。

「どんだけ待たせるきよ転校生わ」

鈴は一組ではなく二組だが、さすがに転校生の噂は耳にしてくるよ

うだ。

「といひでセシリア、転校生ってどんなヤツよ。」

「で話は今日きたばかりの転校生の話題に。」

「火神雄、日本の代表候補生とか。まあ、それなりに、普通ぐら  
いには格好よかったですわよ。・・・・一夏さん程ではあつません  
が」

所々を強く強調し言つたが、最後の部分だけは小さく呟く。

「へー。なるほどね

あまり興味がないのか、鈴は素つ気なく返事を返す。

「とつあえず早く来ないかしら。暇でしようがないわ

「ですわね。さすがにこのままでは退屈すぎます」

今か今かと対戦相手の転校生を待つ二人。

十分後

。

会場となるアリーナの観客席もだんだんと騒ぎ出しへきた。

「まだかなー？」

「かなり期待してるんだけどねー」

「どんな専用機なんだろー？」

観客席ではそんな会話が絶えず続いている。

観客の生徒たちも今か今かと待ち侘びているようだ。

「遅ー！遅すぎだー！ 何やつてんのよ転校生ーーーーー！」

「鈴さん。淑女たるもの、いつも使途やかにいなくては男性にモテませんわよ」

「な、なんですかってー。誰の『ルル』がいいのかー。」

「もちろん、わたくしの隣にいる人に言ってるに決まってますわ」

「あ、あんたねえ・・・・」

まだ来ない対戦相手に 対しての苛立ちと、セシリアに 言われたこと  
に 対しての苛立ちが 混ざり合って、鈴は 怒りだす。

「いい度胸ねセシリ亞。ここでアンタと戦つてもいいのよ。どうせデータを取るだけだし。それに私が勝つに決まってるんだから」

そう言って鈴は大型の青龍刀2基を展開。そしてそれを連結し、器用にクルクルと回して構える。

「今の台詞、聞き捨てなりませんね。わたくしが鈴さんにおねとへ」

「あらあ、聞こえなかつたかしら？ 私はそいつ言つたつもつだつたんだけどー？」

鈴に煽られたセシリアは、肩をワナワナと震わせて、怒り心頭のようだ。

「いいでしょ。その安易な考へで身を滅ぼす」ことになるですから。  
身の程をわきまえたほうがよくつてよ?」

セシリ亞も鈴と回じゆひに武器を展開する。

手に握られたのは、巨大なライフルだ。  
それを鈴に照準を合わせて構える

セシリ亞も鈴を煽る。

その様子を見ていた観客の生徒たちはなんだなんだと騒ぎ出した。

「なになに?」

「あの一人なんか様子変じやない?」

「おお、仲間割れ勃発かー!」

それを見ていた生徒たちは、ワイワイと先程以上に騒ぎ出す。

「いいぞいいぞー」

「前哨戦開始かー!」

だんだんと盛り上がり始めたアリーナ内は、どんどん盛り上がりってきた。

そんな生徒たちを余所に、鈴とセシリ亞は一触即発の臨戦態勢をとる。

「かかってきなさいよ?」

「あら、そちらからどうぞ…またか、鈴をとあるお方が怖じたわけではないですかよねえ？」

「ふん、言つてくれるじゃない。いいわ、せつせつ終わらせてあげるー！」

言つが先に、鈴はセシリアに向かつて突っ込んでいく。

「ハアアアアツ…！」

「迂闊ですわー！」

連結した青龍刀を頭の上で回転させながら、その勢いで縦に薙ぐ。

セシリアは鈴のその行動を予期していたのか、予め展開していたショートブレードでカウンターを狙う。

「そんな小細工…」

鈴はお構いなしにそのまま一気に振り下ろす…

(（もうつたーーー））

両者が同じよしに一撃が入るのを悟つた瞬間、

ヒュンッ…ガキンッ…！

「な、なにー？」

「何事ですのー？」

「何事ですのー？」

二人の間に何者かが突然現れた。

「少し落ち着こうか二人とも」

一人の武器を片方ずつ握られている刀で受け止めた。

右の反りの入った短刀でセシリアのショートブレードを、左も同様に反りが入った長刀で鈴の青龍刀をそれぞれ受け止める。

「ふんっ！！」

受け止めた二人の武器を力だけで振り払う。

「「キヤアー？」」

ドーン！と、アリーナのステージ両端に衝突する鈴とセシリア。

「まったく、仲間割れなんてしないでくれよ。いきなりだからビックリしたじゃないか」

ステージ中央で一人呟くEVAが一機　　もちろんそれはオレだ。

「い、いきなり何すんのよアンタ！」

中国の代表候補生だろうか？は威勢よく立ち上がりオレに怒鳴る。

「そりですわ！ 邪魔をしないでください！」

同じくイギリスの代表候補生であるう女の子が怒鳴る。

どつちが中国代表候補生かイギリス代表候補生なんてのは私見だ。

だが、髪の色やなんかでだいたいは予想がつく。

それにしてもなぜオレが怒られるんだ！ オレが正義ではないのか？

「あー、惜しいなあ」

「面白そりだったのにー」

ブーブーと観客席から不満の声が聞こえてきた。  
どつやら完璧にオレは邪魔物扱いらしい。

オレ・・・・良いことしたはずだよな？

オレのジャステイスをその場にいる全員に否定されてしまつとは・・  
・・なんとも肩身が狭い。

今のオレは、アウエーで大量得点を決めたサッカー選手ながらの  
嫌われようであろう。

「あ、あのー・・・す、すいません・・・」

困ったときは謝る。これしかない。

残念ながら、アウエーで大量得点を決めたサッカー選手のような防  
弾ガラス並のハートは備わっていない。

思春期を迎えた今のオレは、些細なことで割れてしまつ薄つぺらなガラス並のハートなのさ……。

「なんか腹立つてきたわ」

「奇遇ですね鈴さん。わたくしもですわ」

パリン！と今、オレのハートが粉々に砕け散る音が聞こえた気がしないでもない。

（だ、駄目だ。オレにこの状況は耐えられない）

『鳳、オルコット何をやつている。時間を押しているんだぞ』

アリーナ全体から織斑先生の声が響く。

ビクッ！…と、名前を呼ばれて怯える一人。  
やつぱあの先生は怖いよな・・・。

『いい度胸だ。試合が終わつたらその有り余る元気を特別メニューの訓練で発散させてやろう』

それを聞いた代表候補生一人はまたもや喧嘩を始めてしまう。

『セシリ亞！ アンタのせいで私までとぼつちり受けたじやないのよー！』

「な、ななななんですか！ 先に喧嘩を売つてきたのは鈴さんでしょー！」

お互に顔を真っ赤にして怒りを現わしている。

おいおい、また喧嘩かよお・・・。

いい加減にしないと

『お前ら、いますぐ死にたいようだな・・・今からそつちに行くから待つていり!』

ほらー、怒られた!

つてあれ?なんか、オレまでとばっちり受けた!?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8968y/>

---

IS<インフィニット・ストラatos>漆黒の騎士と白銀の騎士  
2011年11月27日13時50分発行